戦後中国長期残留者の軌跡と記憶

飯塚 靖（下関市立大学経済学部国際商学科 教授）

はじめに

「満洲国」（以下かっこ省略）及び戦後中国東北部において、日本人は中国人・朝鮮人・モンゴル人・ロシア人などと交流・軋轢・抗争を繰り広げ、悲喜こもごも様々な体験を織りなした。その体験は、大きな感慨や教訓を与える内容であり、これまで回想記・小説・ルポルタージュなど多くの書物が刊行された。また、近年はこうした「満洲の体験」をテーマとした歴史研究も活発化しており、満洲からの引揚者研究も盛んとなり（詳しくは、加藤聖文ほか編『挑戦する満洲研究』東方書店、2015 年）、「留用」者及びその家族に関する研究も出されている（堀井弘一郎『「満州」から集団連行された鉄道技術者たち』創土社、2015 年など）。なお、この「留用」とは、中国側が戦後も日本人を帰国させずに使役したことに対する、中国側の呼称である。

本研究は、上記の最新の研究動向をふまえて、満洲国で暮らし、戦後中国で技術者・労働者等として留用され、中国での長期残留を余儀なくされた人々について、未刊行史料（「中共事情」）や聞き取り調査、及び現地追跡調査により、中国での波乱に満ちたその軌跡を解明しようとするものである。地質技術者の留用については、桐谷文雄氏（満洲鉱業開発株式会社鉱産資源調査所調査課長）を中心とした戦後長春での動向を、「中共事情」などを用いてまとめた[1]。さらに本研究では、中国長期残留者に聞き取り調査を実施し、その調査対象者と共に現地を訪問し、過去の足跡をたどり、新たな記憶の呼び覚ましをはかるという現地追跡調査も試みた。具体的には、下関市在住の国谷哲資氏と共に北京や中国東北部を訪問し、かつての生活や労働の場を再訪し、その場所が現在はいかに変貌しているのか、あるいは現在も当時の施設・建物は残っているのか、そうした追跡調査を実施した。さらにその調査の中で、国谷氏には過去との対話から生じた新たな記憶や感慨を自由に語ってもらい、それをビデオカメラで撮影した。

国谷哲資氏は、2020 年 1 月現在 87 歳であり、満 5 歳で渡満し父母と新京で暮らし、13 歳（中学校 1 年生）で敗戦を迎えた。引揚の苦難の中で安東において父を亡くし、母子 2 人となり、親子ともども安東で中国共産党軍の被服廠に留用された。被服廠は後に朝鮮国境付近を転々とし、1948 年 9 月にハルビンに移動した。その後、鶴崗炭鉱で

1　飯塚靖「日本人地質技術者の戦後『満洲』での留用」（『下関市立大学論集』第 63 巻第 2 号、2019 年 9 月）。なお、桐谷文雄氏の長男・明雄氏からは、父親の留用時の状況やご自身の戦後長春での生活について聞き取りを実施した。その内容は改めて文章にまとめ公表したい。

の労働に従事し、同地の日本人前衛組織・東北建設突撃隊に参加し、労働と学習の中で社会主義思想に目覚めた。1953 年には北京に移動し、日本共産党の非公然指導部・北京機関の自由日本放送（対日宣伝放送局）に勤務した。さらに、中国人民大学に学び、文化大革命を経験し、1967 年母子で帰国した。帰国後は、一貫して左派政党の活動に従事した。国谷氏に関しては、被服廠や鶴崗炭鉱時代、及び 1953 年以降の北京での活動について、すでに詳細な聞き取りを行い文章にまとめている[2]。

なお、本研究プロジェクト開始後、北京在住の林華氏（92 歳）と連絡が取れ、国谷氏を伴って北京を訪問した。林華氏は、鶴崗炭鉱の東北建設突撃隊幹部として、大塚有章の下で活躍した女性であり、人民共和国建国後は北京放送日本語アナウンサーを長く勤めた。国谷氏と林華氏は、面識はなかったが、同時期に鶴崗や北京で暮らしており、対談では両者の記憶が共鳴し合い、極めて貴重な証言を得ることができた。

Ⅰ．国谷哲資氏の足跡と追跡調査

１．戦後中国での足跡

国谷氏の父親は満洲国経済部の係長職であったが、肺結核を患い病弱であった。1945 年 8 月 13 日、両親と国谷氏の 3 人は、ソ連軍の進攻を前に経済部職員・家族と共に日本への引揚げのため、新京より退避した。しかし、安東で足止めをくい、同地で敗戦を迎えた。12 月には同地で父親が病死し、母親が中国共産党軍（八路軍）被服廠に就労した。46 年 2 月には、国谷氏も同廠に雇用され、掃除などの下働きに従事した。被服廠はその後、国共内戦の中で朝鮮国境付近を転々とし、48 年 9 月にはハルビンに移動した。

1949 年 7 月、中国側から日本人留用者の帰国の指示があり、国谷母子も帰国準備のため瀋陽市に移動した。だが、船舶の不足を理由に帰国ができず、同年 9 月、母子は新たな職場を求めて黒龍江省の鶴崗炭鉱に向かった。同炭鉱は国共内戦期にも中国共産党の管理下にあり、共産党が内戦を戦うための重要な石炭供給基地となっていた。そこでは、元満蒙開拓団員や元満蒙開拓青少年義勇軍の青年達など、多くの日本人が炭鉱労働に従事していた。国谷氏は、最初の 1 年半は採炭労働者として、その後肺浸潤を患って坑内電気関係の仕事に変わり、52 年 12 月まで炭鉱での労働に従事した。同炭鉱では、大塚有章（赤色ギャング事件にて逮捕・投獄、満洲映画協会上映部巡映課長）に主導された東北建設突撃隊が活発に活動していた。同隊は、中国共産党の東北地方建設に積極的に協力することが中国革命及び日本人民の前途にも役立つことであるとして、鶴崗炭鉱での石炭増産運動や日本人の学習活動に積極的に取り組んでいた。国谷氏も同隊の一

---

[2] 国谷哲資「激動中国に青春を生きる―留用中国で学んだ人生観―」（広島中国近代史研究会『拓蹊』第 2 号、2015 年 7 月）、同「北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史」（広島大学大学院総合科学研究科『アジア社会文化研究』第 20 号、2019 年 3 月）、飯塚靖「回想記解題『北京追憶―若者が体験した戦後日中関係秘史』」（同上）。

員となり、中国・日本の革命及び世界情勢などを学んだ。

1952 年 12 月、国谷母子は、中国において日本革命に協力すべく、日本人向け新聞を発行する瀋陽の民主新聞社に移動した。さらに、53 年 2 月には北京に移り、日本共産党の非公然指導部・北京機関の自由日本放送に勤務した。この北京機関は、中共中央対外連絡部の敷地内に所在していた。国谷氏は自由日本放送の受信班に所属し、仲間と共に NHK ラジオ放送の傍受を担当した。

北京機関解散後の 1957～59 年、国谷氏は労農速成中学にて学び、59 年中国人民大学政治経済学部に入学した。65 年 7 月同大学を卒業し、8 月日本共産党北京代表砂間一良の秘書となった。1966 年、文化大革命を経験し、日本共産党とは決別し、67 年 11 月に母子で帰国した。

２．中国現地追跡調査―記憶をたどる旅―

2019 年 4・5 月には国谷氏と共に、北京市での追跡調査を実施した。本調査には、共同研究者の張龍龍氏（早稲田大学総合人文科学研究センター助手）が同行した。同年 8 月には、同じく国谷氏と共に中国東北部（大連・ハルビン・鶴崗・長春）を訪問し、国谷氏が生活し労働をした現場を訪ねた。本調査にも張龍龍氏が同行し、またハルビン・鶴崗の調査には、丸山鋼二氏（文教大学国際学部）も参加した。

（１）北京調査（2019 年 4 月 29 日～5 月 2 日）

北京調査の主な目的は、北京機関（自由日本放送）の所在地の確認ならびに林華氏訪問であった。「林華」は北京放送でのアナウンサー名であり、本名は林紀美（旧姓常沢）、満洲映画協会の事務職員をしていたが、敗戦後、大塚有章などと行動を共にし、鶴崗炭鉱東北建設突撃隊幹部として活躍した。人民共和国建国後には北京放送日本語アナウンサーとなり、国際放送局幹部の中国人男性と結婚し、ご主人を亡くした後も、健在で北京にて暮らしている。なお、林華氏の回想記は、『「ツルオカ」復刻版』（三人社、2019 年）に掲載されている[3]。今回の北京調査の内容は下記の通りである。

◎4 月 30 日（火）

午前、中共中央対外連絡部所在地を確認。1950 年代と同一場所に所在。国谷氏の記憶では、この対外連絡部に隣接して北京機関の建物があったとのことであるが、現在は区画整理によりビルが建ち並び、場所は確定できなかった。午後、林華氏の紹介により天安門広場東側に位置する中国国家博物館において、「東北建設突撃隊隊旗」を見る。同旗には事故、病気などで死没した突撃隊員の氏名・死没年月日が記載されている（写真①、資料①）。林華氏によれば、その死没者の大部分は事故死とのことであった。その中で、永野末孝氏は、かつて筑豊炭鉱で働いた経験があり、鶴崗での事故の際に多く

[3] 林華「回想『ツルオカ』」（坪井秀人、秦剛によるインタビュー）、同「鶴崗炭鉱で活躍した『東北建設突撃隊』について」（『「ツルオカ」復刻版』三人社、2019 年）。

の仲間の命を救った、だが後に結核となり病死したとのことであった。

その後、東交民巷の台基廠大街に行き、国谷氏が何度か訪れたことのある西園寺公一の旧居を訪ねる。中国人民対外友好協会のエリアの中に当時のままの屋敷が残っていたことを国谷氏は確認したが、そのエリアの入り口には警備の公安が居り、内部に入ることは出来なかった。続いて、1960 年代初頭多くの日本人商社員が駐在していた新僑飯店を訪問する。当時の建物が残っていた。

◎5 月 1 日（水）

林華氏宅を訪問し、国谷氏を交えて林華氏への聞き取りを行う（写真②）。林華氏よりの聞き取りの概要は次の通りである。すなわち、建国当初の北京放送局の建物・設備は、戦前からのもので非常に貧弱なものであった。放送局は西単の時計台のすぐ近くにあった。建物・器材は、日本占領下で日本側が使用し、その後国民党が利用、それを人民共和国政府の国際放送局が接収したものであった。当時は番組が録音できず、生放送で送信した。北京機関の自由日本放送もそこから生放送で送信していた。国光昭二氏（自由日本放送のアナウンサー、大塚有章の長男）も同所で放送をしていたが、林華氏とは挨拶を交わさなかった。林華氏のご主人は延安整風運動で弾圧を受け、その際に着せられた濡れ衣は 1972 年まで晴れなかった。ご主人は反右派闘争でも批判され、文革では長期間労働改造所送りとなった。

なお、筆者は丸山鋼二氏と共に 11 月に北京を再訪して、林華氏よりさらに詳しいお話しを伺った。5 月及び 11 月の聞き取り調査については、改めて文章にまとめたい。また、国谷氏には調査終了後、今回の調査の感想をまとめていただいた（資料②）。

（2）東北調査（2019 年 8 月 20 日～27 日）

東北調査の主な目的は、国谷氏と共にハルビン、鶴崗、長春などを訪問し、国谷氏が実際に生活や労働をした現地に立ち、それらの場所がどのように変貌を遂げているか、当時の記憶の痕跡は何か残っているかを確認することであった。具体的には、ハルビンでは国谷母子が 1 年余り勤務した被服廠、鶴崗では職場・南山炭鉱ならびに炭鉱住宅の所在地・六号集落、長春市では父親の職場・満洲国経済部及び住まいである官舎、さらに学びの場であった順天小学校・新京第二中学校などである。そして、これらの場所を再訪していかなる感慨を抱いたか、新たな記憶の呼び覚ましはあったか、これらの点を国谷氏に自由に語ってもらうこととした。

◎8 月 21 日（水）大連

タクシーで大連の市内、星海公園、旧満鉄病院などを巡る。国谷氏は 1956 年夏、袴田里見に同行して東北各地を回り（いわゆる袴田大名旅行）、大連では星ケ浦の別荘に宿泊したが、現在の星海公園は高層マンションや高級ホテルが林立し、かつての面影なし。

◎8 月 22 日（木）ハルビン

午前、旧被服廠とおぼしき、大直街に面した現在はショッピングセンター（哈特購物広場）などがある場所に行く。ショッピングセンタービルや高い建物ばかりで、国谷氏の記憶の痕跡もなし。区政府機関に居た若い女性に聞くと、その一帯は元紡織工場であったとのことであり、被服廠については知らないとの返答。隣には哈爾浜工業大学の広大なキャンパスがあり、同大学は 1920 年に創設され、来年 100 周年を迎えるとの掲示あり。被服廠の手がかりをつかめず。人民解放軍の敷地であった被服廠の一部の土地が哈爾浜工大に提供された可能性あり。その後、平房の「侵華日軍第 731 部隊罪証陳列館」を見学。

夜、ホテル 3 階レストランにて、丸山鋼二氏が購入したハルビン市の写真集に 1920 年代のロシア語の地図があることを発見。そこには、軍の宿舎の配置図があり、国谷氏はそれが被服廠に間違いないことを確認した（写真③、証言④）。

◎8 月 23 日（金）鶴崗

午前、ハルビンから鶴崗に移動。高速鉄道のハルビンーチャムス間は、既存線の綏化を経由するものではなく、松花江南岸を方正・依蘭などを経由して行くルートであった。チャムスー鶴崗間は在来線。車内で鶴崗の南山炭鉱での暮らしについて語ってもらう（証言⑤）。

午後、砿史館（東山万人鉱）に行くが、同館は一般に公開されたものではなく、企業の附属施設であり、しかも休館であった。次に、国谷氏が働いた南山炭鉱を訪問したが、紹介がないとダメということで、炭鉱内の見学は断られる。正面入り口で、保衛担当者と記念写真を撮る（写真④）。国谷氏が実際に働いた南山炭鉱の斜坑は別のところにあり、現在の場所は 1959 年に開坑した竪坑であるが、来年には閉鎖とのことであった。国谷氏の言では、南山炭鉱のエリアは当時と変化なしとのことであった。夜ホテルにて、南山炭鉱での仕事について語ってもらう（証言⑥）。

◎8 月 24 日（土）鶴崗

鶴崗市の地図に記載されたホテル近くの「東北電影制片廠展覧館」に行く。新京にあった旧満洲映画協会は、中国共産党により接収され、国共内戦の中で長春から鶴崗に移転し、東北電影制片廠と名乗った。そこには満映関係の日本人も多数留用されており、中国映画の発展に貢献したと評価されている。しかし、展覧館は閉鎖され、映画館の新しい建物となっていた。映画館裏の老幹部センターの守衛に教えてもらい、鶴崗博物館に行く（写真⑤）。同館は数年前にリニューアルしたものであり、充実した展示であった。炭鉱に関しては、捲櫓（まきやぐら）や炭鉱住宅の写真が展示され、さらに安全帽（籐で編んだヘルメット）、硫酸バッテリーキャップランプなどの実物展示もあった。その他、鶴崗に拠点を置いた東北電影制片廠の展示もあった。ただ、内部の写真撮影は不許可。同館見学後、チャムス行き列車を待つ鶴崗駅構内にて、鶴崗博物館の感想や当時の記憶を語ってもらった（証言⑦、写真⑥）。さらに、チャムス行きの列車の中で、日本人労働者や東北建設突撃隊について語ってもらった（証言⑧）。

◎8 月 25 日（日）長春

午前、長春市内の調査。満洲国の司法部と経済部の場所を確認。どちらも現在は、吉林大学医学部ベチューン記念病院となっていた。経済部の建物をバックに、国谷氏にソ連進攻時の集団引揚げの状況を語ってもらい、録画する（写真⑦、証言③）。続いて、順天小学校の位置を確認しようとその周辺を歩いたが、同小学校関連の施設は見つからなかった。おそらく廃校となり、ビルが建てられたものであろう。その跡地とおぼしき場所を一応確認する。時間の都合により、国谷氏一家の住んでいた官舎所在地には行かず。

午後、長影旧址博物館（東北電影制片廠は 1955 年に長春電影制片廠に改称）に行く（写真⑧）。留用された旧満映日本人職員についての掲示もあり、充実した内容であった。国谷氏は、袴田里見一行と訪問した際に映画「上甘嶺」のロケ現場を見学し、後にその映画を見た。その劇中歌「我が祖国」は国谷氏の大好きな歌となった。その後、タクシーの中から、国務院、皇宮、関東軍司令部などの建物を見学した。

◎8 月 26 日（月）長春

午前、旧大陸科学院と新京工業大学の調査。旧大陸科学院は中国科学院長春応用化学研究所となっており、元の建物はなし（写真⑨）。その道路を挟んで反対側に新京工大があったと推測されるが、現在は吉林師範大学キャンパスとなっており、新京工大の痕跡はなし。その後、国谷氏の学んだ新京二中を探すために、タクシーで長春市第六中学に行くが、新京二中に関する痕跡なし。大連行きの高速鉄道を待つ間に、長春駅のホームにて新京での小中学校時代を語ってもらう（証言①、証言②）。

以上が東北調査の概要であるが、国谷氏にも調査の経緯と感想をまとめていただいた（資料③）。

Ⅱ．国谷哲資氏の証言

以下では、東北での現地追跡調査の中での国谷氏の語りを、時系列順に紹介する。なお、以下の証言は、一字一句を文字に起こしたものではなく、あくまでも発言の概要である。

１．新京での子供時代

（１）官舎での生活と順天小学校

8 月 25・26 日と長春市内を調査した。26 日午後、大連市に向かう高速鉄道を待つ間に長春駅のホームにて、今回の再訪の感想や小学校時代の想い出を語ってもらった。

証言①

私の父は経済部の係長であり、最初は親子三人で第三代用官舎の二間の住宅で暮らしていた。官舎は鉄筋コンクリート造 2 階建ての集合住宅であり、我が家はその 1 階部分

であり、風呂は五右衛門風呂であった。小学校 4 年の時に第二代用官舎に移り、3 部屋となり、子供部屋も持てた。五右衛門風呂の燃料は石炭であり、厨房には都市ガスが来ていた。和式の水洗トイレがあり、トイレット・ペーパーを使用し、用を足した紙はトイレにそのまま流すことができた。冬にはスチームによる集団暖房が設備されており、官舎のあちこちにボイラーの高い煙突が立っていた。経済部でも課長レベルの住宅はもっと広かった。家庭内の電気製品としては、アイロンとラジオがあった。官舎内のどの家庭でもラジオは持っていた。ラジオは受信状態が良くなく、日本の大相撲の中継が好きだったが、雑音が多く聞き取りにくく、耳を近づけて何とか必死に聞き取ろうとした。歌や落語はレコードで聴いた。父がそうしたレコードを買ってきたりもらってきたりして、手回し蓄音機でかけていた。歌手としては、東海林太郎やディック・ミネを良く聴いた。官舎では、朝は納豆売りが来て、また冬場は焼き芋売りが「ぬくえー、ぬくえー」という独特な売り声で回っていた。夜泣きそばは、官舎をグルグル回るのではなく、官舎の空き地にリヤカーを止めて商売していた。これらの売り子はすべて、当時「満人」と呼んでいた中国人であった。

順天小学校は、6 年生の時には 60 人クラスが 3 つあった。3、4 年次には 4 クラスあったが、翌年には満映（満洲映画協会）の近くに春光分校が開設された。順天小学校の先生方はすべて日本人であり、生徒もすべて日本人であった。ただ、5 年次に一人だけ中国人生徒がいた。生徒の多くは官吏や国策会社社員の子弟であり、特に満業（満洲重工業開発株式会社）関係の子供たちが多かった。敗戦間近になると小学校でも勤労奉仕が始まり、大陸科学院の近くに学校が農地を借り、生徒たちでジャガイモをつくった。なお、敗戦間近でも新京では食糧不足で困ったことはなかった。ただ、米の配給が減らされ、白米の中にジャガイモや大豆を入れた芋ご飯や豆ご飯を食べるようになった。

私は相撲が好きであり、かなり強かった。町内会の草相撲の試合に良く出場し、勝って賞品としてノート、鉛筆などの学用品をもらった。夏場にはどの学校にも土俵がつくられ、学校でも相撲に熱中した。新京には日本人小学校が 12～13 校あり、年に 1 度相撲の対抗試合が開催された。私は主将として選手を率いて出場したが、決勝戦では白菊小学校の大きい者に負けてしまった。当時は戦時中であり、攻撃精神を養うということで、まわしを取って投げることは禁止されており、突き技での勝負であった。当時私は横綱照國が好きだったので、私のあだ名も照國だった。また父親は、故郷鳥取県の名和町の地名にちなんで、町内会の草相撲では「名和の里」のしこ名を私に付けてくれた。

順天小学校に体育館はなく、講堂のみであった。冬場には運動場がスケートリンクに早変わりした。10 月初旬に運動場に水を流し込むと、10 月 15 日頃には完全に凍結して、一周 250mのスケートリンクになった。授業時間の合間、合間に飛び出して、夢中で滑った。なお、官舎や小学校の周辺の道路は舗装されており、冬場でも歩くことに支障はなかった。冬場は防寒靴（中に毛の入った編上げ靴）で登下校した。

（2）新京第二中学校の思い出

8 月 25 日朝のホテルロビー、及び 8 月 26 日午後の長春駅のホームにて、中学校時代について語ってもらった。

証言②

中学校に通ったのはわずか 4 ヵ月のみであり、あまり想い出がない。一番印象に残っているのは軍事教練である。軍装姿の軍事教官（退役大尉）がおり、整列やほふく前進、木銃を担いでの行進の訓練などが行われた。敗戦直前でも内地と違い、新京では勤労動員はなく授業がなされた。授業は、国語、数学などのほか、英語も教えられた。

新京には一中と二中の二つの中学校があった。両校にはレベルの差はなく、居住地区により進学先が割り振られた。長春の日本人住宅区の北半分が一中の学区であり、南半分が二中であった。中学校は 1944 年までは 5 年制であったが、私が入学した 45 年より 4 年制となった。二中 1 年次は、1 クラス 40 人で 1 学年 5 クラスであった。もちろん生徒はすべて男子であり、全員が日本人であった。官吏や国策会社社員の子弟はほとんどが中学校に進学し、中学校に行けない者が新京商業学校に進んだ。入学試験はさほど倍率は高くなく、簡単な筆記試験と体力測定があった。私の自宅から中学までは歩いて 40 分ほどであり、南嶺運動場を横切って通学した。なお、この運動場では建国 10 周年式典が皇帝溥儀を迎えて開催され、日本人の子供たちが動員され、小学生であった私も参加した。

同級生のあこがれは軍人であり、陸軍幼年学校に入るのが一番のエリートであったが、二中では 1 学年に 2 人しか入れなかった。陸軍幼年学校は中学 1 年次に受験し、他方で陸軍士官学校は中学 4 年次に受験できた。

新京には、敷島高等女学校（北地区）、錦ヶ丘高等女学校（南地区）、弥生実践女学校の 3 つの女学校があった。弥生実践女学校は私立であり、家庭科中心の良妻賢母教育がなされ、新京駅の近くにあった。私の従姉は日本から来て、我が家で一緒に暮らし、弥生実践女学校に通った。彼女は卒業後に満洲中央銀行に就職し、アパートを借りて一人暮らしをしていたが、終戦の前年に日本に戻った。

（3）敗戦と新京撤収

8 月 25 日午前、吉林大学医学部ベチューン記念病院として利用されている建物が、満洲国経済部の建物に間違いないことを確認。この経済部の建物をバックに、ソ連進攻時の経済部職員・家族の集団引揚げの状況を語ってもらう。肺結核を患い病弱だった父親は、この雨中の逃避行が影響し病状が急激に悪化、1945 年 12 月安東の旧満鉄病院で死去した。こうして、その後 22 年にも及ぶ国谷母子の中国での波乱の歴史が始まったのである。国谷氏は、この人生の転換点の現場を再訪できて、感無量の様子であった。

証言③

この建物（吉林大学医学部ベチューン記念病院）が、当時の経済部の建物に間違いない。1945 年 8 月 13 日、この経済部に全職員とその家族が招集された。中庭では逃げる準備で書類がばんばん燃やされていた。集められた職員と家族は、300 人は下らなかったと推測される。建物 5 階に集合した全員に、「皆さんには朝鮮経由で日本に引揚げていただきます。だが途中の四平ぐらいでソ連軍と遭遇するかも知れません。その時には皆さんこの包みを飲んで下さい」と言われ、白い包みが渡された。それが青酸カリだった。荷物は持ち出すことができず、着の身着のままで、夜にはトラックで新京駅に運ばれた。この逃避行は「死に旅」に行くのも同然であり、荷物など持ち出せなかったのは当然であった。その後、無蓋列車に乗せられ、土砂降りの雨の中 2 泊 3 日で安東駅に着いた。安東駅に到着するとまもなく、駅のプラットホームに憲兵が出て来て、「畏れ多くも正午から玉音放送がございます。皆さんの列車はこれでストップです。ご静聴をお願いします」と言われた。ここから私の波乱の人生が始まるわけです。

２．ハルビンの被服廠について

8 月 22 日午前、雨の中での旧被服廠の調査で何ら手掛かりが得られず、国谷氏は落胆していた。しかし、同日夜、ホテル 3 階レストランにて、丸山鋼二氏が購入したハルビン市の写真集（兪濱洋主編『哈爾濱・印・象』（上）、中国建築工業出版社、2005 年）を見ていたところ、1920 年代のロシア語のハルビン市街地図が掲載されていた。そこには、軍兵営の宿舎配置図があり、国谷氏はそれが被服廠に間違いないことを確認した。また、その地図から、午前中に訪れた大直街の当該場所が被服廠所在地であることも確認できた。そこで、地図を見ながら被服廠の記憶を語ってもらった。

証言④

（軍兵営の宿舎配置図を指さしての国谷氏の発言）、私の記憶では、骨組みだけとなっていた旧兵舎を修復し工場とし、職員宿舎はその隣の建物であった。旧兵舎はこの地図の通り全部で 8 棟あり、うち 4 棟を工場にしたと記憶する。ここにチチハル被服廠などの人員も合流して、日本人が総勢 150～160 名ほどとなった。被服廠の脇は崖となっており、崖下に鉄道線路が走っていた。私の同僚の一人がこの線路に身を投げて自殺した。その線路を超えたところにロシア人の集落があり、私はそこに牛乳を買いに行った。後に家族持ちは、近くの沙曼屯の元満鉄宿舎に移った。その後、被服廠の独身女性の何人かが、牡丹江の鉄道関係留用者のもとに嫁いだ。そしてこの人たちが天水（甘粛省、天水—蘭州間の鉄道建設）に行ったと聞いている。

３．鶴崗炭鉱での暮らしと労働

（１）鶴崗炭鉱での暮らし

8 月 23 日、チャムスから鶴崗に向かう列車内で、70 年以上前の記憶をたどり、炭鉱での暮らしを語ってもらった。

証言⑤

私は南山炭鉱第二坑で採炭労働に従事した。住まいは炭鉱から 25 分ほど歩いた家族向け炭鉱住宅であり、その地区は六号と呼ばれていた。まず山を越えて、下ったところに線路があり、さらに下ったところに六号の炭住があった。六号には平屋の長屋が 10 列ほど並び、500 所帯ほどの中国人・日本人が暮らしていた。我が家は畳 2 畳半ほどの広さであり、他にかまどがありそこで煮炊きをした。冬場の暖房はオンドルであり、かまどで煮炊きをした煙が床下を回り、床を温めた。煮炊きの燃料はもちろん石炭であった。オンドルの煙は床下を通り、煙突から出たが、風向きによっては逆流することがあり、煙が部屋に充満した。母も一度逆流した煙により、一酸化炭素中毒で意識不明になった。鶴崗の中心部には大きな病院もあったが、幸い母は自宅で療養し、回復した。鶴崗は一番寒いときにはマイナス 30 度になり、南山炭鉱からの帰りに 25 分ほど歩くと、靴底に靴下がバリっと凍りついてしまった。

風呂は共同風呂であり、ヤマから家に帰るとまず大福もちを 3 つくらい頬張り、やおらヘルメットをとり、作業着を脱いでどてらのような物に着替え、共同風呂に行った。食料は配給ではなく、各自で購入できた。ただ、いちいち各家庭が買い出しに行くということではなく、日本人のおばさんたちが買い出しにでかけ、各家庭に配ってくれた。大福もちはおばさんたちの手作りであり、それを購入した。賃金は日払いであったが、金額がどの位であったか覚えていない。

（２）炭鉱での労働

8 月 23 日夜、昼間の南山炭鉱訪問をふまえて、南山炭鉱の場所や仕事について、語ってもらった。

証言⑥

当時の南山第二坑の入口近くには、煉瓦作りの中国人宿舎があった。その横に二坑の入口があり、ここで硫酸電池のキャップランプが渡され、その際に大きなアンパン一つをもらった。このアンパンが、坑内での 8 時間労働の食事であった。飲み水は、「魔法瓶」と呼んでいたものが休憩所に置いてあり、それを飲みながらアンパンをかじった。採炭作業は昼夜交代の 3 交代制であり、坑内では 8 時間働いたが、食事はこのアンパン一つだけであり、発破を掛ける 15 分の休憩時間にそれを食べた。発破は日に 3 回は掛けられ、その間が休憩時間となった。

（3）鶴崗博物館を見学しての感想と記憶

8 月 24 日昼、鶴崗駅構内にて、同日鶴崗博物館を見学しての感想や当時の記憶を語ってもらった。

証言⑦

鶴崗博物館で印象に残ったのは、まず炭住の写真が展示されていたことである。自分たちが住んでいた六号地区とは特定されていなかったが、我々の住まいはあのとおりそっくりそのままであった。そして何といっても、捲櫓（まきやぐら）の写真は、そこで働いた者にとっては心をくすぐるものであった。あの捲櫓により坑内から 15 輌の炭車を引き揚げてきて、貯炭場の方に炭車を流したなあという記憶がよみがえった。捲揚げ機のプーリー（滑車）は直径 3m ほどもあり、それで太いワイヤーロープが捲き揚げられた。炭車を引き揚げるために捲揚げ機が動き出すと櫓そのものが上下に振動し、そばまではよほど勇気がないと行けなかった。この炭車に乗って、捲揚げ機のワイヤーロープと炭車を結ぶためのピンを挿したり抜いたりするのが「どんこ」と呼ばれる仕事であった。敏捷で体力のある 10 代の若者がその仕事を担当し、職場の花形であった。この「どんこ」とは、登鉤（ドンゴウ）がなまって呼ばれたものであろう。私はとろい方であり、「どんこ」の仕事などとてもできなかった。

また、安全帽（ヘルメット）や硫酸バッテリーのキャップランプの実物が展示されていたことも感慨深かった。安全帽は籐で編んだものであり、「ザルボウ」と呼んでいた。我々がかぶった物は、展示の物とは違い、色は染められておらず白いままであった。日本などの金属製のヘルメットとは違い、強度は弱かったと思う。硫酸バッテリーランプは坑内に入る前に各自に渡された。硫酸がこぼれてしまうこともあり、作業ズボンがボロボロになってしまって、着替えなければならなかった。

採炭場が重圧で全部潰れてしまうことを「バレる」と言った。私が働いた採炭場は炭層 8m であり、採炭して進むのは 2m の高さであった。2m 上の天井には岩盤があり、坑木を底面に打ち込み天井を支えた。ただ、細い坑木だけで上の 6m の炭層を支えることはできず、さらに坑木で井桁を組んでその中にボタを入れた。井桁は 5m 間隔に作られ、これが支えとなった。この井桁があっても「ゴー」という音がし出したら、採炭場はぺちゃんこになってしまった。これが当時「バレる」と呼んだ、落盤の恐怖である。

（4）炭鉱の日本人労働者と東北建設突撃隊

8 月 24 日午後、鶴崗を離れチャムスに向かう車内で、日本人労働者や東北建設突撃隊について語ってもらった。

証言⑧

中国人労働者はほとんどが文字の読み書きができず、機械に弱かった。そこで、ソ連

製のコールカッターは、日本人の働く南山第二坑にまず導入された。日本人労働者はほとんどが小学校高等科まで出ているので、計算もでき、機械の操作もできた。1950 年に南山二坑にコールカッターが導入されると、出炭量が急激に上がった。南山二坑の日本人労働者組織は東北地方の労働模範単位となり、そして大組長は特級労働模範となった。

東北建設突撃隊の南山区支隊長は畑善則さんだった。林華さんから聞くところによれば、畑さんは突撃隊解散式の司会を務めたということである。1952 年 12 月 1 日に日本人引揚の日中共同声明が出され、翌年 3 月より引揚を始めると公表された。それに合わせて、53 年 4 月に突撃隊の解散式が開催されたのである。ただ私は、日中共同声明が出されるとまもなく瀋陽の民主新聞社に移ったため、解散式には出席していない。

むすび

以上、JFE21 世紀財団からの支援を受けて実施した研究について、現地追跡調査の概要と成果を中心に本報告をまとめた。

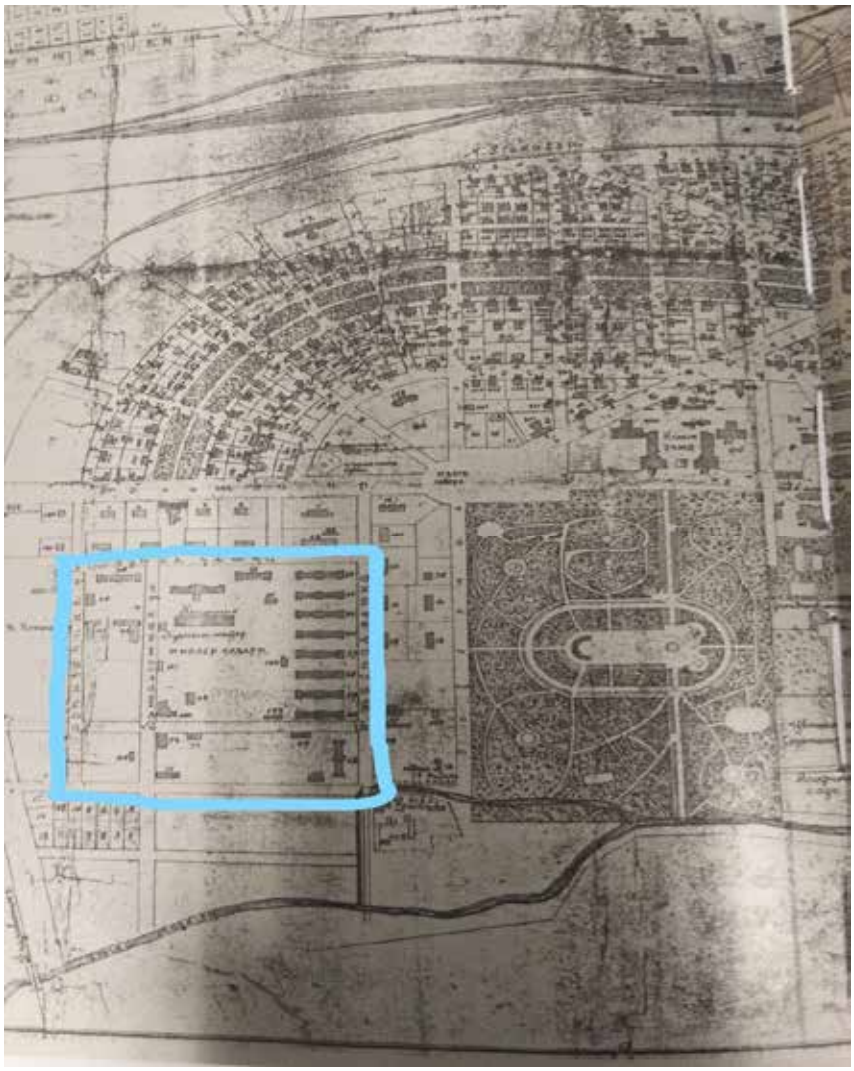
今回の現地追跡調査では、中国東北部を訪問して、国谷氏の足跡をたどり、貴重な証言を得ることができた。改革開放政策による経済成長を経て、東北部も大きく変貌していたが、満洲国期の建造物の一部は歴史的遺産として保護されていた。特に長春では経済部の建物が保存されており、国谷氏にはその場に立ち、引揚げの記憶を語ってもらった。また、鶴崗の南山炭鉱に関しては、閉山直前のこの時期に現状を確認できた。新京の小中学校やハルビンの被服廠などについては、当時の痕跡を確認することもできなかったが、道路配置や区画、古地図などから、所在場所が確認できた。そうした現場を歩くことにより、既発表の回想記では充分語られなかった新京での生活と小中学校時代、鶴崗炭鉱での暮らしと労働などについて、詳細な証言が得られた。

今回の調査では、国谷氏と共に北京の林華氏を訪問し、両者の対談を実現したことも大きな成果であった。両者の記憶の共鳴の中で、鶴崗炭鉱の東北建設突撃隊の活動内容や構成員、さらには隊員の戦後日本での活動などについて、様々な証言を得ることができた。この鶴崗炭鉱で働いた若者達の多くは、国谷氏や林華氏と同様に、その後も中国との関わりを持ち続け、戦後の日中関係を根底で支えたと推測される。その証言内容の公表は後日を期したいが、その証言は戦後日中関係史を人的交流の側面から解明する貴重な糸口となるであろう。

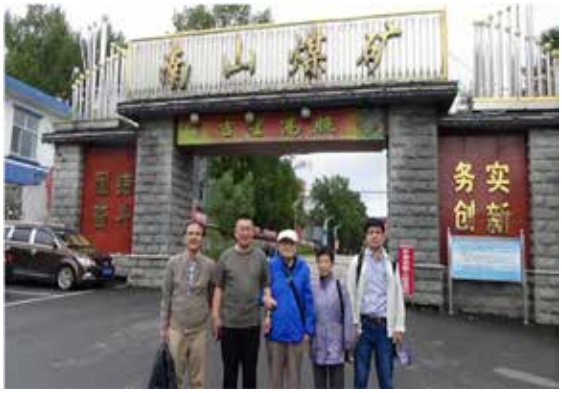
写真①　東北建設突撃隊隊旗

写真②　林華氏（中央）と国谷氏（右）

写真③　ハルビン被服廠が置かれた軍兵営（枠内）



写真④　南山炭鉱正面入り口



写真⑤　鶴崗博物館

写真⑥　鶴崗博物館を見学しての感想を
語る国谷氏（鶴崗駅構内）

写真⑦　旧経済部前で新京引揚げを
語る国谷氏

写真⑧　長影旧址博物館（旧満映）

写真⑨　旧大陸科学院の跡地に建つ
中国科学院長春応用化学研究所

資料①　東北建設突撃隊死没者氏名、死没年月日

下段		
氏名	死没年	死没月日
船木上	1946年	1月12日
山田典兄	1946年	2月8日
石川悦二	1946年	6月13日
西勝昭二	1946年	7月24日
小室徳太郎	1947年	2月25日
上村耕一郎	1947年	6月7日
安平源八	1947年	8月24日
関屋良一	1947年	9月17日
岩澤信	1947年	9月25日
高見澤光雄	1947年	10月17日
中原寛司	1947年	11月13日
今井賢	1948年	1月29日
宮野一義	1948年	2月26日
富田正男	1948年	2月29日
永野末孝	1948年	3月19日
森本繁夫	1948年	4月7日
佐藤正	1948年	5月21日
増田勉	1948年	8月3日
増原利和	1948年	12月31日
落合光司	1949年	3月16日
増村敏行	1949年	5月25日
高橋秀雄	1949年	10月1日
大西行雄	1949年	10月3日
槇千代	1949年	10月16日
柴田由子	1949年	10月16日
岡留宗男	1949年	不明
朝倉辰夫	1950年	不明
安藤智夫	1950年	不明
山中幸太郎	1950年	不明
羽原美津江	1950年	不明
篠木昭三	1950年	不明
嶺山安雄	1950年	不明
加藤朝男	1950年	不明

上段		
氏名	死没年	死没月日
大谷嘉蔵	1951年	3月8日
和田雅安	1951年	3月15日
鈴木愼三	1951年	12月11日
木谷希代典	1951年	12月13日
平田力丈	1951年	12月20日
小室文治	1952年	1月11日
丸山秀雄	1952年	2月19日
鈴木米蔵	1952年	2月21日
森山定夫	1952年	4月30日
小塚實	1952年	5月5日
松橋逸郎	1952年	5月10日
岡田貞夫	1952年	5月10日
長谷川幹雄	1952年	6月8日
坂本春枝	1952年	9月2日
崎谷節治	1952年	9月6日
登坂慶助	1953年	3月27日
池田亮一	1963年	10月28日
北尾忠義	1968年	7月2日
大塚有章	1979年	9月8日

注：死没月日の不明箇所は、「東北建設突撃隊」と記載された布が上部に縫い込まれているため。

資料②　50年ぶりの北京

国谷哲資

今年（2019年）5月はじめ、鶴崗炭鉱（中国東北部）の戦後の歴史を学ぶために北京に住む林華さんを訪ねた。彼女は1946年暮れ近くに「東北建設突撃隊」の一員として鶴崗に入り、当時1500人余りいた日本人労働者を人民中国の建設者として組織していった“老革命”であった。私は1949年9月に母とともに鶴崗に行った若輩であり、「突撃隊」の一員ではあったがとても林華さんと対談できる相手ではないと、いささかおもはゆい気持ちがしていた。

ところが、林華さんが私を見るなり「戦友よ」「戦友よ」とくりかえされ、ハッとさ

せられた。

その日、私たちは林さんの案内で天安門広場に建った歴史博物館に行き、林さんが寄贈された「突撃隊」旗の説明を受けた。林さんは車イスから身を乗り出して、隊旗に印された物故隊員の人となりをたんたんと紹介して下さった。若い隊員が初期に多く亡くなっていることを見るだけでも、零下 30 度にもなる極寒の地で三度のメシもままならず、病に倒れても薬もない状況を知ることができた。そのうえに初期の日本人工員の一部には旧軍人、憲兵、特務・警察など反共の軍国主義思想に染まった人たちがいた。彼らは「おれたちは騙されたんだ」と帰国運動を煽ったり、「突撃隊」指導者の暗殺まで企んでいた。それらに打ち勝って教育を通じて「突撃隊員」をどんどん増やして、石炭の増産につとめ中国東北から全土の解放に貢献した。私はこれまで聞いたり読んだりした「突撃隊」の歴史を反すうしながら林さんの話を聞いた。

そしてパッと脳裏に浮かんだのは中国労農赤軍の二万五千里の長征だった。それは「戦闘隊」であると同時に「種まき隊」といわれた。私が鶴崗に行ったころはすでに異質分子は成敗されて、日本人労働者の大半が「突撃隊」に加入し、私の住んでいた南山六号の家族宿舎の学習室でも中国の解放戦争の様子だけでなく、日本の労働者や農民などのたたかいについても文献の学習がおこなわれていた。いまなお脳裏に焼きついているのは、1952 年の血のメーデーの写真展だった。そうした学習を通して私も働く者が主人公となる社会をめざして共に働き、たたかうという中国人民との共通の目標を自覚できるようになった。

第二日目の林さんの話しから、鶴崗帰りの人たちの多くが職業の違いはあっても、その共通の目標のために生きておられることも知り、嬉しさを禁じえなかった。「戦友よ」と声をかけることのできる林華さんの矜持の深さを知った。負けてはおられない、心臓の鼓動が止まるまでは…の思いに駆られたのだった。

さて 50 年ぶりの北京の第一印象は、想像を超える街の変ぼうぶりだった。北京空港から都心に向かう八車線の道路、市内を縦横にまたぐ高速道路網、都内に林立する 20 階を超える高層ビル群など、私は “今浦島”の感を否めなかった。私たちの泊まったホテルも 26 階建てで日頃は外国人客が多いそうだが、私が見かけたのは中国人家族の連れが多く、服装もポピュラーだった。「改革・開放」のマイナス面である貧富の格差の拡大など、馬上の花見では見とどけることはできなかった。

しかし、精神世界の変化は地下鉄などで実感できた。「降りる客がおりてから…」と貼紙があるのに、乗る客がどんどん乗り込む。座席に座った客はスマホいじりに一心不乱、年寄りや子供連れの女性が前に立っても知らぬ顔だった。文革前の「雷鋒精神」が称揚され、「人間は変わることができる」と私を確信させたものはもはや消え去っていた。それに文革前には相手が誰であろうと「同志」と声かけをしていたのに、いまでは「先生」とか「女士」などと呼ばなくてはならない、旧中国に戻ったのかと違和感を覚えざるをえなかった。

最後に林華さんが熱をこめて語ってくれた人民解放軍の朱瑞将軍について一言。林さんが朱瑞将軍と出会ったのは1946年の西安炭鉱の時代。朱瑞氏は抗日戦争の時期には山東省の八路軍の幹部の一人、東北解放戦争時には後勤部長として活躍、惜しくも戦陣に倒れた人。林さんは将軍の追悼集をひもときながら、「おごらずたかぶらず、ひたすら人民に尽くす人だった」と語っていた。「戦友よ」と声をかけてくれた林さん、どこまでも働く者の幸せのためにたたかいつづけましょうと訴えてくれたものと思う。

資料③　中国東北部再訪

国谷哲資

1）8月20日、空路、博多から中国の大連へ。翌21日、タクシーで中山広場周辺と星海公園一帯を回った。中山広場では、旧大和ホテル、横浜正金銀行などそのまま残り、ホテルや銀行となっていた。「遺留旧跡」の説明板があった。恐らく米軍の空爆でやられた東京はじめ日本の大都市にはこうしたものは皆無に近いだろう。

星海（旧星ケ浦）公園は、町全体がホテル、遊戯場となっているほか、岬の先端と元の海水浴場のはずれにある広大なハイテク地帯を結ぶ往復二段大橋（約6㎞）ができていた。ここは1956年夏に一度来たことがあり、海水浴場近くの別荘に何日か泊ったが、もはやその面影はなかった。

2）8月21日、高速鉄道で大連からハルビンに移動した。約3時間30分の高速だった。旧満洲時代はおそらく一昼夜ぐらいの道程であった。夕方ハルビンに着き、旧キタイスカヤの夜のにぎわいを満喫した。翌22日は、小生の務めた人民解放軍後勤部の被服廠跡を探し求めた。だが、あの広大な敷地にあった被服廠や労働者住宅の痕跡すらなく、南崗地域は5階建の住宅、その1階が各種商店のひしめく繁華街に変わっていた。

やむなく周辺にあるハルビン工業大学のキャンパスを回った。そのあと、平房にある旧日本軍 731 部隊跡に建てられた記念館に行った。非人道の細菌戦研究で人体実験までした部隊の跡地であり、是非とも見たかったが、身体の都合でかなわなかった。残念至極。

3）8月23日、高速鉄道でチャムス経由鶴崗炭鉱に向かった。旧満洲時代にはなかった新しい鉄道（方正や依蘭を通る）で、約2時間でチャムス着。鶴崗行の普通列車に乗りかえて午後一時半頃、70年ぶりの鶴崗市に到着した。

当日午後は市内調査。一時は100万都市（現在は減少）となっただけに、街中は大変ぼうしていた。政府や党の機関、金融機関や各種会社は高層ビル、労働者の社宅も5階建の建物に変わっていた。私が1949年9月から52年12月まで、南山二坑で採炭労働にたずさわっていた時期に比べると、まるで別世界であった。

地図を見ながら鉱山史館や万人坑記念館に行ったが、いずれも休館日。やむなく共産党市委員会を訪ねた。当初受付の人は警戒気味だったが、私が「70 年前に南山で採炭をしていた。なつかしくてやってきた」というと、表情も様子も一変、南山鉱山ならこの道をまっすぐ行って右に曲がればすぐだと教えてくれ、タクシーに乗るまで送ってくれた。

「南山鉱山」というアーチのある玄関に到着。受付室の人に「70 年前…」という来意を告げると、好意的に中に通して、電話連絡をしてくれた。しばらくして、「保衛科」の責任者が来て、「みなさんの来意は分かったが鉱内を見学することはできません。市政府の宣伝部を通して頂ければ可能ですが…」と丁重に断った。やむなく「それじゃ南山鉱山というアーチをバックに写真を…」とお願いし、それならばと、保衛科の人も入って写真をとった。聞くところに受付室のある側は 1959 年に建てられた竪坑であり、アーチのある向かい側に斜坑が残っているということだった。小生の記憶にあるヤマとは違って、70 年の歳月を感じざるをえなかった。市党委員会の一人は、「残念ながら南山鉱は来年閉鎖になる」と教えてくれた。

翌 24 日、長春映画製作所記念館を訪ねたが、すでに閉鎖されており、裏には何かがあるかもしれないというので裏に回ってみると、「老人大学」の看板がかかっていた。守衛の人に「私は 70 年前に…」というセリフをいうと、「それなら博物館に行けばいい」と教えてくれた。市博物館は 2～3 年前にリニューアルした、展示も立派なものだった。1919 年に炭層が見つかり、民国、偽満洲国、解放と三つの時代の変せんを経たこと、とくに解放後のエネルギー供給源として大きな役割を果たしたこと、そして採炭工のヘルメット、硫酸バッテリーの現物も展示されていて懐かしさも増した。時間が足りず残念だった。タクシーでの帰途には、私と母が生活していた家族住宅（日本でいえば「炭住」）「六号地区」の脇を通り、5 階建の労働者住宅と商店が並ぶ町に変わっていた。

4）8 月 24 日昼に鶴崗に別れを告げ、チャムス経由で深夜、長春に着いた。翌 25 日は先ず長春にあった私の母校「順天小学校」と住宅「第二官舎」を探した。結果は跡形なしで「およそこの辺だろう」で終わった。しかし、それができたのも附近の元順天大街（現新民大街）にあった「司法部」（日本の法務省か）がそのまま残り、その南を走る道路から推察できたものだった。ついでに言えば、「司法部」の真向かいは、旧「経済部」で私の父の務めていた官庁だった。ほかに偽満洲国時代の国務院、治安部、交通部などが残っており、吉林大学やベチューン記念の病院となっていた。

この日の午後は長春映画製作所の記念館を訪れ、一時間半ばかりかけて見学した。私が好きだった「私の祖国」や「白毛女」の主題歌が展示冒頭に流れるなかで、文化大革命以前につくられた「名作」の写真、映像をなつかしく見せてもらった。また、大塚有章、仁保芳男氏らに率いられた日本人スタッフの展示もあった。

翌 26 日は、旧大陸科学院跡をまず訪ねた。元の白亜の建物はなくなっていたが、同じ研究施設「長春応用化学研究所」としてリニューアルされていた。旧新京工業大学と私が四ヵ月間通った「新京第二中学校」は確認できなかった。

旧満洲国時代の建物で活用されていたのは、現人民広場を囲む「満洲中央銀行」「満洲電信電話株式会社」「首都警察庁」「市公署」のほか、「関東軍司令部」「三中井デパート」「康徳会館」など多数にのぼり、驚嘆した。

＜感想と意見＞

・どの都市も人が多く、道は広いのに乗用車が多く、人は信号を無視してその間を縫って道を渡っているのには正直驚いた。それに土・日曜や休日を問わず若者が闊歩し、新興国の息吹を強く感じた。さあ 14 億の人人がこれからどんな国にするだろう。頼もしい限りだが、それだけに国の指導中枢の手腕が問われることになろう。

・とくに長春市で感じたことは、まず各種大学と病院が多く、教育・文化都市として整然としていた。「ベチューンを記念する」と銘打った病院は第三病院まであり、「人民のために尽くす」をモットーとしていた。加えて、長春映画製作所の存在は、「錦上に花を添えて」いた。そのせいか、若い人たちも落ちつきを感じた。

・鶴崗市はさすが労働者の街として地味で質素、働く仲間を大切にする連帯意識を強く感じた。欲を言えばかつて 1500 人余の日本人が採炭事業に従事し、解放戦争から新中国建設に貢献したという歴史を掘り起こし、整理して博物館などに展示し、後世に残す作業をすすめられないかという願望を持った。長春映画製作所の記念館にはそれがあり、歴史における国際連帯性が後世に伝えられていた。

・訪問した各都市で歴史教育が重視されていた。日本のかいらい国家「満洲国」の支配に反対して命を投げ出してたたかった「抗日聯軍」の顕彰がおこなわれていた。博物館や記念館にその業績が展示されていたが、楊靖宇、李兆鱗、趙尚志ら抗日聯軍の代表的人物の名を冠した街や道路、公園もあった。そうした影響であろうか、若い人たちが列車の中で、私たちのキャリーバックをさりげなく棚に上げてくれたり、駅でのタクシー待ちの順番を優先してくれたりした。北京とは違うおおらかさやモラルの高さを感じることができた。

＜付記＞本研究は公益財団法人 JFE21 世紀財団 2018 年度「アジア歴史研究助成」による成果の一部である。